



縄文晩期の住居跡「初確認」

縄文人が今に伝えるものとは



亀ヶ岡石器時代遺跡で初めて確認された住居跡

国が指定する史跡亀ヶ岡石器時代遺跡の周辺部分から、縄文晩期（約3000～2300年前）とみられる竪穴住居跡が市教委の試掘調査で、初めて確認された。関係者は、これまでほとんど分かっていなかった同遺跡の集落構造を解明する第一歩として期待を寄せている。

亀ヶ岡石器時代遺跡

亀ヶ岡石器時代遺跡は県道鱈ヶ沢蟹田線の西側にある木造亀ヶ岡亀山・木造亀ヶ岡近江野沢・木造館岡沢根地内に位置する。

亀ヶ岡石器時代遺跡は縄文晩期を代表する遺跡で、史跡面積は約3万8000平方メートル。ユネスコ世界文化遺産登録を目指す「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」を構成する遺跡でもある。国重要文化財の遮光器土偶（愛称「シャコちゃん」）が出土したことで、全国的にも

知名度が高い。しかし、縄文人の暮らしぶりを出す遺構は、史跡部分の石器時代遺跡やその周辺の亀ヶ岡遺跡から土坑墓（どこうぼ）が発見されただけだった。

竪穴住居跡を初確認

竪穴住居跡が発見された場所は、石器時代遺跡西端から約200メートル西側にある住宅敷地内を試掘したところ発見された。住居跡は直径4.5メートルの楕円（だえん）形で、地表から約30センチ掘ったところからは火をたいした跡の焼土や住宅を支えた柱穴の跡を確認。また、住居跡近くからは、縄文中期のフラスコ状土坑なども発見され、遺跡に年代的な広がりがあることも分かった。

記録に残っている限りでは、画家の蓑虫山人（みのむし・さんじん）が125年前の1884（明治17）年に発掘調査してから、亀ヶ岡遺跡で確認された初めての住居跡である。



上空からみた亀ヶ岡石器時代遺跡周辺の様子



亀ヶ岡石器時代遺跡指定地形図



埋設土器：縄文中期中葉（約4500年前）のものと推定。直径約30センチの穴の中に、土器を立てて埋めたもの。一般に子供のお墓などと考えられるが、それぞれの遺跡によって性格や機能は異なる。また、「土器埋設遺構（まいせついくこう）」、「埋甕（うめがめ）」などの呼び名もある。



フラスコ状土坑：縄文中期中葉（約4500年前）のものと推定。断面を見ると入口よりも底面の方が膨らんでいて、理科の実験で使うフラスコのように見えることから、この呼び名がついた。一般的には貯蔵穴として用いられるが、まれにお墓として使われることもある。



住居跡の床面直上から出土した縄文晩期の壺形土器。この土器が縄文晩期のものと判定されたため、住居の年代を「縄文晩期」と確定した。



出土した縄文後期初頭の土器を中心とする遺物。今後、組み立てられて縄文人の生活を探る手がかりとなる。



12月8日、現地説明会を開催。地元住民や市内外の縄文ファンら約130人が佐野学芸員から遺跡の概要や過去に出土した土坑墓などについて説明をうけた。

住居跡を視察した村越潔弘前大学名誉教授は「床面に残るつぼ型土器の型式から、住居跡が縄文晩期と特定できる。それに縄文中期の土坑や後期初頭の土器なども見つかったことで、亀ヶ岡石器時代遺跡は複数の年代にまたがっている遺跡だろう。今回の発見が亀ヶ岡に暮らしていた縄文人の集落や社会構造がどのようなものであったかを知る大きな手がかりになる」と話している。



むら こし きよし
村越 潔 氏
(弘前大学名誉教授)

佐野忠史学芸員は「今回、今の場所を試掘する決め手となったのは、地主さんが土器を提供してくれた時、敷地内に貝塚もあったよと教えてくれたのを聞いて。なぜなら貝塚があるということは、そこに人々が住んでいたことになるから。台地の平坦面部分は集落の中心で住居があり、その周囲に墓域や土器などの捨て場、祭祀空間があったことも推定できた」と亀ヶ岡に暮らした縄文人の謎を解明する端緒に意気込みを語っていた。



さ の ただし
佐野 忠史 学芸員
(市教育委員会文化課)